

近世鹿児島城下町の能舞台について

—鹿児島城跡で確認された能舞台跡を中心に—

西野元勝

はじめに

令和5年2月、近世島津家の居城であった「鹿児島城跡」⁽¹⁾（別名：鶴丸城跡）が国史跡に指定された。正確には、国史跡城山に本丸跡（現在の鹿児島県歴史・美術センター黎明館、以下黎明館）や二之丸の一部（現在の鹿児島県立図書館）が新たに追加された範囲拡大及び名称変更である。

鹿児島城跡の国史跡指定に向けての取組の契機になったのは、平成24年度に始まった石垣の傷み等を把握し、修復を行うことを目的とした鶴丸城跡保全整備事業である。同事業において、鹿児島県立埋蔵文化財センターは、平成26年度より鹿児島城跡の石垣背面状況確認のための発掘調査を行った。その中で、鹿児島城跡の評価に係る重要な調査成果が相次ぎ、その成果を受けた同事業の専門家検討会議での委員の意見によって、国史跡指定を目指す発掘調査や文献調査が行われることになった。

平成27年度の発掘調査では、能舞台跡が確認された。このことは、島津家の伝統文化に改めて注目する契機となり、それは、鹿児島城跡の国史跡指定の際に認められた大きな価値の一つとなった⁽²⁾。

今回は、近世鹿児島城下町で盛んだった伝統文化の一つである能楽について、その広がりや変遷を、これまでの能楽研究や発掘調査で確認された鹿児島城跡の能舞台跡、鹿児島城下町の能舞台などから明らかにしていきたい。

1 中世末～近世にかけての鹿児島の能楽⁽³⁾

(1) 能楽の広がり

現在の能は、南北朝時代頃から「猿楽」と呼ばれた芸能の役者たちが演じたものが基となり、室町時代に京で観阿弥、世阿弥らによって大成された。

戦国時代～安土桃山時代になると、戦乱を避けた文化人の地方への下向や畿内での中央政権の誕生により、京を中心とした畿内の茶の湯等の文化が地方に波及した。地方の有力武士は、文化人の下向や招聘を通して京を中心とした畿内の文化を積極的に取

り入れており、それはやがて全国に広まった。能楽もそうした動きの中で広まっていったと考えられる。

江戸時代になると、幕府は能楽を保護し、将軍の御成や公式な接見、叙任、世子の誕生などの祝事や法事、正月の謡始など公的な儀礼に組み込まれた式学となり、幕府主導の能が江戸城本丸の表舞台で定期的に演じられた。そのため、その能に列席する大名も幕府に習って能楽を取り入れ、江戸藩邸や藩内の城や御殿に能舞台を建立した。こうして能は、武家社会に浸透していった⁽⁴⁾。

(2) 鹿児島の能楽研究

近世鹿児島の能楽については、文献史料を用いて、薩摩藩の能楽師や島津藩主と能楽との関係とその辺遷を明らかにした林和利の一連の研究があり⁽⁵⁾、その後の能研究の基礎となっている⁽⁶⁾。

また、田村省三や関屋俊彦による薩摩藩の能楽関係の史料紹介が行われている⁽⁷⁾。

これらの研究により、鹿児島の能楽は、中世末から催されるようになり、その後、鹿児島城下町で盛んに催されていたことが明らかになっている。

(3) 中世末～近世前半の鹿児島城下町の能楽

鹿児島でいつ頃能楽が広まったかは不明だが、戦国時代～江戸時代にかけて島津家に仕えた上井寛兼の記した『上井寛兼日記』によると、既に天正年間（1573～1592）には、島津家当主の島津義久や義弘をはじめ多くの有力武士が謡や舞を嗜んでおり、八朔などの年中行事や琉球国の使節の歓待などの公的行事や合戦を控えた陣中でも謡や狂言が催されていた⁽⁸⁾。この時期は、一王大夫（一王雅楽助）という能楽師や太鼓方の奥山左近将監、狂言方の石原治部右衛門らが活躍していたようである。また、『上井寛兼日記』には、家中の有力武士の多くが、京都より下ってきた能楽師より教えを受け、能楽の稽古に励んでいた様子が記され、彼らが一王大夫とともに、演能に参加することもあった⁽⁹⁾。この時期は、能楽が全国に広がり始める時期であり、鹿児島でも能楽が受け入れられていた様子がわかる。

能楽を盛んに催した初代薩摩藩主島津家久⁽⁹⁾の時代には、能楽は鹿児島城下町でさらに発展した。家久は、実父島津義弘から2度にわたり能に対して熱を入れることを戒める書状が送られるほど能に打ち込んでおり⁽¹⁰⁾、後世の伝承でも能楽趣味に関するものが伝わっている⁽¹¹⁾。

慶長7(1602)年、家久は、禁中にも召し出されて演能していた京都の手猿楽者虎屋長門(小畑弥兵衛、後に中西長門守秀長)を召し抱えた。虎屋長門は、その後加増されて禄高千石もの破格の待遇を得て、後に母方の姓である中西を名乗る。中西家は、以後、幕末まで能大夫の家として続いた⁽¹²⁾。この時期には、多くの能楽師が召し抱えられており、こうした能楽師が鹿児島城下町の能楽を担っていた。

この時期、薩摩藩の能楽において最も重要な出来事は、寛永7(1630)年の江戸桜田藩邸への第3代将軍徳川家光(4月18日)と大御所秀忠(4月21日)の御成能楽である。江戸桜田藩邸では御成門と主殿、寢殿、数寄屋、たいつこの部屋、鎖の間、能舞台と楽屋などを備えた新たな建物が新設されており、将軍の御成において対応がどれほど重大だったかがわかる⁽¹⁴⁾。幕府の式楽となった能楽は、こうした将軍の御成などの公式な行事で催されるものであり、茶の湯などと共に一種の外交ともいえるものである。家久のいきすぎたともいわれる能楽趣味も、こうした外交手段を磨くという側面もあったと考えられる。

こうした家久の能楽への傾倒からか、慶長18(1613)年の6月から12月には能楽関係の記事があり⁽¹⁵⁾、藩内の武士たちが能や謡の稽古を盛んに行っているなど、鹿児島城下町で能楽熱が高まっていることが窺える。

(4) 近世中期～近世後期の鹿児島城下町の能楽

近世中期～後期にも藩主が能を催した記録が残っている。特に、第8代薩摩藩主島津重豪は、西洋の文物を積極的に取り入れた蘭癖大名として知られているが、江戸や鹿児島で度々能を催し、自身も多くの能楽でシテ方(主役)を務めた。宝暦11(1761)年、藩主としての薩摩藩への初入部の際には、再び江戸へ立つまでの約1年の間にすくなくとも3回の能楽を催しており、このうち、宝暦12(1762)年正月4日の演能では、重豪自身が「羽衣」を舞っている⁽¹⁶⁾。重豪は、宝暦13(1763)年にも薩摩での年忘れの宴の席で「井筒」と「天狗舞」を舞っている⁽¹⁷⁾。

さらに、宝暦14(1764)年に鹿児島城下町の稲荷

神社で結願のために催された法楽能(神仏に奉納する能)では、重豪が「嵐山」、「田村」、「羽衣」、「安宅」、「弓八幡」の全てのシテ方を務め⁽¹⁸⁾、明和2(1765)年には、12月4日の卯の刻から翌5日の卯の刻までまる一昼夜徹して能20番・狂言10番の上演を試みるなど⁽¹⁹⁾、盛んに能楽を催している。重豪は、その後も鹿児島での能楽を催すなど、歴代薩摩藩主の中でも最も能楽を嗜んだ藩主である。また、第11代将軍徳川家斉の義父になり、多くの子息を他藩の養嗣子に送り出すなど、大きな勢力を持っていた。こうした結びつきを強める外交面でも、能楽を習得することが有益であったと考えられる。

第11代薩摩藩主島津斉彬は、能を演じた記録はないが、藩主としての薩摩藩への初入部の際(嘉永4(1851)年5月10日)、一門4家(加治木島津家・垂水島津家・越前島津家・今和泉島津家)の夫婦を城中に呼び、能楽を興している⁽²⁰⁾。

第12代薩摩藩主島津忠義の実父で、幕末に藩政を掌握して国父と呼ばれた島津久光の残した「玉里文庫」には、22部の能楽関係の写本・完本が含まれており(『玉里島津家文書目録』)、8部84冊が残存している⁽²¹⁾。その中の『宝生流謡本』の各冊には、曲名前の右肩に稽古した回数かと思われる朱線が入っているなど、久光が熱心に修練していた痕跡が窺われ⁽²²⁾、終生にわたって盛んに能楽を催している。

このように、近世中・後期においても島津家では能楽が催されていた。

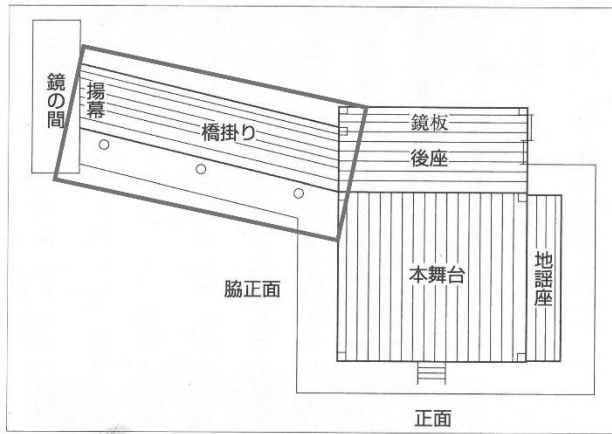
次に、江戸時代中～後期に能楽を担っていた能楽師について述べる。近世前半までは、京などより召し抱えた能楽師が薩摩藩の能楽を担っていたが、近世中後期になると「士役者」と呼ばれる武士階層の能楽師が担うようになる。主役を演じるシテ方では、前述した中西家のほか、柏家、有川家などが、その代表的な家系である⁽²³⁾。後に郷士(鹿児島城下町以外に住む武士)も「士役者」に組み込まれた。また、天明7(1787)年に発布された薩摩藩の能役者に関する規定では、「御能役者」という新たな役職が設けられた。「御能役者」とは、士分ではなく町民や陪臣から取り立てられた能役者のことで、帯刀や服装、藩主への謁見の順番は士分に準ずる扱いを受け、芸道においては、「御能役者」も「士役者」も差別なきこととされた⁽²⁴⁾。この規定からは、実力さえあれば誰でも能楽師になることができることがわかる。中世末に鹿児島で催されるようになった能楽は、近世を通して武士階層だけでなく町民にまで広がるほど、盛んになったのである。

中世末～近世の鹿兒島と能楽に関する年表

No.	当主・藩主	年号	西暦	月日	主な出来事	出典		
1	島津義久	天正2	1574	8月1日	シテ方一王大夫がこの晩、旧例のとおり、殿中の八朝の賀において式三番を演じる。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
2		天正3	1575	4月10日	島津義久が琉球国使僧款待して催した宴席で一王大夫が舞を演じる。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
3		天正10	1582	11月16日	肥後八代に藩陣中、島津義弘の宿における談合のあと、狂言方石原治部右衛門尉が酒宴の席で狂言を演じる。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
4				11月21日	八代の伊集院忠棟の宿へ島津義弘・中書家久が臨んだ際の酒宴の席で幸若与十郎の幸若舞とともに石原治部右衛門尉が狂言を演じる。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
5		天正11	1583	9月14日	肥後八代藩陣中、上井覚兼が平田光宗（義久家老）・天草鎮尚を饗した席で、一王大夫が謡を誦う。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
6				10月26日	八代藩陣中、島津忠辰主催の酒宴の席で幸若舞とともに石原治部右衛門尉が狂言を演じる。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
7				11月11日	八代藩陣中、雨中の慰みに石原治部右衛門尉が狂言の物語をする。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
8		天正12	1584	1月12日	覚兼たちが殿中に出仕して、義久に年頭を賀した際の宴席で、一王大夫が謡を誦う。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
9				1月13日	太鼓方奥山左近将監、島津義久が伊集院忠棟の館に臨んだ際の宴席で鼓を打つ。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
10				3月21日	島津義久が宮原筑前守景種の宴に臨んだとき、奥山左近将監が松尾与四郎とともに仕舞の鼓を打つ。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
11				6月15日	島津彰久の館で彰久はじめ地下衆に奥山左近将監が鼓の稽古をつける。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
12				6月16日		平田光宗の館で奥山左近将監を指南として鼓の稽古があった際、一王大夫が謡を受け持つ。	大日本古記録『上井覚兼日記』	
13						平田光宗の館において、島津彰久・平田増宗・税所助五郎・本田大炊大夫・川崎織部らに、奥山左近将監が稽古をつける。	大日本古記録『上井覚兼日記』	
14				6月27日	本田親貞宅の宴において小謡を誦い、立って舞う。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
15				9月12日	城一要（肥後隈本城主）の館へ島津義弘が招請された際の宴席で、奥山左近将監が松尾与四郎とともに仕舞の鼓を打つ。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
16				10月2日	島津義弘が名和頼孝（肥後宇土領主）を饗した際、奥山左近将監が仕舞の太鼓をつとめる。小鼓は松尾与四郎、笛は養田長丞。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
17				10月3日		肥後出陣中、伊集院忠棟の宿における宴席で、奥山左近将監が仕舞の鼓を松尾与四郎とともにつとめる。	大日本古記録『上井覚兼日記』	
18						八代藩陣中、伊集院忠棟の宿における宴席で、石原治部右衛門尉が乱舞・幸若舞とともに狂言舞を演じる。	大日本古記録『上井覚兼日記』	
19				10月4日		島津義弘が合志親重（肥後合志城主）の館に臨んだ際の宴席で、石原治部右衛門尉とともに狂言の舞を舞う。	大日本古記録『上井覚兼日記』	
20						島津義弘が肥後合志城主の合志親重の宿に臨んだ際の宴席で、石原治部右衛門尉が奥山左近将監とともに狂言舞を演じる。	大日本古記録『上井覚兼日記』	
21				11月29日		島津義久が伊集院忠棟（義久家老）の館に臨んだ際の宴席で、一王大夫が謡を誦う。	大日本古記録『上井覚兼日記』	
22						島津義久が伊集院忠棟の宿に臨んだ際の宴席に客として陪し、奥山左近将監が松尾与四郎とともに鼓を打つ。謡は一王大夫。	大日本古記録『上井覚兼日記』	
23				12月4日	島津義久が弟の義弘を饗した際の宴席で、奥山左近将監が松尾与四郎とともに鼓を打つ。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
24				12月6日	足利義昭の使者寿泉が登城して義昭の内書を島津義久に渡した際の宴席で奥山左近将監が松尾与四郎とともに鼓を打つ。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
25				12月10日	島津義久が従兄弟忠長の館の老臣らの招宴に臨んだ際、奥山将監が松尾与四郎とともに鼓を打つ。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
26				天正13	1585	2月2日	この晩、大勢の若衆が覚兼宅におしよせ、酒宴に及んだ際、一王大夫が謡を誦う。	大日本古記録『上井覚兼日記』
27						2月16日	島津義久が覚兼の宿に臨んだ際の式三献において、一王大夫が三献めに謡を誦い始め、続いて乱舞となる。	大日本古記録『上井覚兼日記』
28		9月16日	肥後藩陣中、島津義弘が有馬晴信を饗した際の酒宴の席で、石原治部右衛門尉が今春又次郎の太鼓、松大夫父子・幸若与十郎の舞とともに狂言を演じる。			大日本古記録『上井覚兼日記』		
29		10月14日	一王大夫が覚兼宅を訪れ、小謡などを誦い、酒宴となる。			大日本古記録『上井覚兼日記』		
30		天正14	1586	9月8日	八代正法寺における渋谷与吉郎一座の演能で石原治部右衛門尉が狂言を演じる。	大日本古記録『上井覚兼日記』		
31	島津義弘	文禄3	1594	4月3日	京都に滞在していた島津家久が徳岡宗与や木下宗固の世話で能の乱舞や囃子を鑑賞する機会を得る。	旧記雑録後編 2巻 1288号 旧記雑録後編 2巻 1393号		
32				11月4日	文禄の役の陣中で家久が父の義弘をもてなした際の余興として乱舞が演じられる。	旧記雑録後編 2巻 1440号		
33		慶長5	1600	4月22日	上京する家久に、伯父の義久が能装束を持たせる。	旧記雑録後編 3巻 536号		
34	島津家久	慶長6	1601	12月5日	義弘が無分別に能に対して傾倒する息子の家久を戒める書状を送る。	旧記雑録後編 3巻 1582号		
35		慶長7	1602	不明	義久、義弘、家久が能学の演目「高砂」の謡を誦う。	旧記雑録後編 3巻 1697号		
36				不明	京都の手袋楽師・虎屋長門が能大夫として薩摩藩に召し抱えられる。	鹿兒島県史料集 XⅢ 本藩人物誌 旧記雑録後編 3巻 1711号		
37		慶長9	1604	不明	初代藩主島津家久、この年の頭屋能を見物できず残念に思っ和歌を詠む。	旧記雑録後編 3巻 1973号		
38		慶長11	1606	2月10日	義弘が家久が京都において、徳川家康の前で能に心を奪われ、座ったまま仕舞を真似たことを伝え聞き、厳しく叱る書状を送る。	旧記雑録後編 4巻 167号		
39		慶長13	1608	2月23日	家久が能の伝書「童舞抄」を書写する望みが叶えられたことに対し、本懐を遂げられたと礼を述べる書状を虎屋長門（小幡長門守）に送る。	旧記雑録後編 4巻 428号		
40				7月20日	島津家久、伏見で乱舞を見る。	旧記雑録後編 4巻 716号		
41		慶長15	1610	8月	島津家久、駿府城で能の演目「高砂」「田村」「源氏供養」「天鼓」「老松」を見る。	旧記雑録後編 4巻 728号		
42				8月18日	島津家久、駿府城で、家康の十二男頼宣と十三男鶴松丸が舞った能を見る	『西藩野史』16		
43		慶長18	1613	不明	虎屋長門が薩摩に下国する。	旧記雑録後編 4巻 1043号		
44	慶長18	1613		鹿兒島城下において能楽熱が高まる（『伊地知重康日記』）。	旧記雑録後編 4巻 1074号			

No.	当主・藩主	年号	西暦	月日	主な出来事	出典
45	島津家久	元和元	1615	7月	一日に二条城で親世大夫と金春大夫の能があり、七日・八日には伏見城でも演能があり、家久が鑑賞した。	旧記雑録後編 4巻 1289号
46				7月7日	島津家久が伏見城で諸大名とともに能楽を鑑賞する。	旧記雑録後編 4巻 1422号
47		元和3	1617	8月24日	家久が自ら舞台上に立って能を演じることがたびたびあり、京都から薩摩に帰国した際は、能を催したいとすることなどを記した書状を娘婿の島津久慶に送る。	旧記雑録後編 4巻 1452号
48		元和9	1623	6月13日	家久、京から次男で八歳の虎寿丸（島津光久）に鼓の稽古を励むように指示する書状を送る。	旧記雑録後編 4巻 1796号
49		寛永6	1629	不明	「鹿兒島亭」において歌会が催され、家久はじめ家臣が和歌を詠んだあと、余興として雅楽と能の舞囃子が演奏される。なお、その際の番組の記録が残る。	旧記雑録後編 5巻 201号
50	寛永7	1630	4月18日	徳川家光が江戸の薩摩藩桜田邸を訪れ、そこで能が上演される。なお、その際の番組の記録が残る。	旧記雑録後編 5巻 303号	
51			4月21日	前將軍徳川秀忠が桜田邸を訪れ、能楽が上演される。なお、その際の番組の記録が残る。	旧記雑録後編 5巻 303号	
52	宝暦10	1760	4月16日	重豪16歳の時、九代將軍家重の右大臣昇進、家治の右大将兼任の祝いで能が江戸で催され、江戸在住の重豪は仰付けにより、この能を見物した。	旧記雑録追録 5巻 2308号	
53			4月27日	家重・家治を祝うため、芝薩摩藩邸において重豪主催で親世流と金春流の宗家を召し、舞を演じさせる。	旧記雑録追録 5巻 2321号	
54			9月5日	重豪、公家衆を馳走して能楽を催す。	旧記雑録追録 5巻 2411号	
55			9月21日	重豪、家治の將軍官下を祝って催された江戸城内の能楽を見る。	旧記雑録追録 5巻 2412号	
56			2月18日	重豪、家治の將軍官下を祝って、老中以下の重職を饗応し、その席で親世・金春各宗家の能が上演される。	旧記雑録追録 5巻 2492号	
58	宝暦11	1761	11月4日	重豪、島津家一門及びその他の役人・藩士を招いて料理を下し、能を見せる。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号 旧記雑録追録 5巻 2586号	
59			11月25日	重豪、藩士諸氏を招いて御膳を進上し、演能を催す。演者は柏源右衛門、中西長兵衛、有川仁平太。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号 旧記雑録追録 5巻 2562号	
60	宝暦12	1762	正月4日	重豪自ら能の演目「羽衣」を舞う。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
61			11月13日	將軍家の嗣子誕生を祝して江戸城で催された演能を見る。	旧記雑録追録 5巻 2738号・2739号	
62	宝暦13	1763	正月6日	重豪が宝生大夫から翁舞の伝授を受ける。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
63			12月23日	鹿兒島で年忘れの宴の席で重豪が「井筒」と「天狗舞」を舞う。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
64	宝暦14	1764	2月5日	重豪が鹿兒島城下稲荷神社で結願のための法楽能を催す。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
65			2月27日	重豪が故継豊の側室であった祖母の嶺松君のために宴を開いて能楽を催し、自ら「加茂」を舞う。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
66			9月27日	重豪が有馬中務大輔以下四名を芝邸に招き能楽を催す。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
67			10月5日	重豪が南部大膳大夫信濃守を芝邸に招き能楽を催す。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
68			12月4日・5日	重豪が琉球人を召して能を見せる。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
69	明和2	1765	3月13日	前年の十一月十三日に重豪が従四位上左近衛權中將に叙任された祝賀会を開き、松平義敏以下を芝邸に招いて能楽でもてなす。	旧記雑録追録 6巻 169号	
70			12月4日	重豪が鹿兒島で、十二月四日から五日にかけて一日中、能と狂言を催す。（この年六月に鹿兒島に戻り何度か能を催す）	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
71	明和3	1766	8月25日	重豪が松平安芸守以下を芝邸に招いて能楽を催す。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
72	明和4	1767	正月13日	重豪が能楽を講じ、自ら「翁」を舞い、松山定静が小鼓を囃す。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
73	明和4 明和5	1767～1768	6月～2月	重豪が鹿兒島に滞在中数度能楽を催す。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
74	明和4	1767	7月27日	家臣伊地知季周ほか十数名を召し、重豪とともに能を舞い、これをみた重豪は家臣に能楽が浸透していたことを大いに喜ぶ。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
75	明和6 明和7	1769～1770	10月～正月	重豪が鹿兒島に滞在中数度能楽を催す。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
76	明和7	1770	4月18日	重豪祖母の浄岸院の御息所に望み、重豪が平服で舞囃子を演じる。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
77			6月25日	重豪が甘露寺規長の娘綾姫と再婚したことを祝い、能楽が催される。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号	
78	安永2	1773	11月27日	重豪が中城王子尚哲以下の琉球人を鹿兒島城に召し、能楽でもてなす。	旧記雑録拾遺 伊地知季安著作資料集 6 近秘野艸 1号 旧記雑録追録 6巻 1109号	
79	天明5	1785	2月～3月	重豪が將軍家治の昇任を祝い、水野忠友以下の重役を招いて能を催す。	旧記雑録追録 6巻 2195号	
80	文化12	1815	4月11日	徳川家康没後二百年に際し、日光に行き、江戸に到着した公卿二名（近衛基前・甘露寺同長）を高輪邸に招いて重豪自ら能を舞ってもてなす。また、長男の斉宣、次男奥平昌高、孫の忠剛、七男の久眠も共に舞う。	旧記雑録追録 7巻 1417号	
81	島津斉興	文政5	1822	9月14日	重豪十三男南部信順（当寺10歳）が一橋治済が芝邸に立ち寄った際のもてなしの舞囃子として「吉野静」を舞う。	旧記雑録追録 7巻 1871号
82				12月15日	南部信順が「岩船」を舞う。	旧記雑録追録 7巻 1897号
83		文政6	1823	4月6日	南部信順が「六浦」、「春日龍神」を舞う。	旧記雑録追録 7巻 1940号
84		天保2	1831	2月27日	南部信順が「道成寺」を舞う。	旧記雑録追録 7巻 2448号
85	4月3日			南部信順が「望月」を舞う。	旧記雑録追録 7巻 2455号	

- ※ 出典の『上井兼兼日記』は、大日本古記録を参照した。また、『旧記雑録』は、鹿兒島県発行の鹿兒島県史料の巻数・史料番号を記した。
- ※ 西野元勝・浅田剛士 2022「発掘調査からわかった島津氏の文化力1（能舞台編）」鹿兒島県立埋蔵文化財センター デジタルコンテンツ「かごしまの考古学」第14回（www.jomon-no-mori.jp）を一部加筆・修正。
- ※ 林和利 2003『能・狂言の生成と展開に関する研究』世界思想社をもとに浅田が作成し、西野が加筆・修正した。



能舞台跡模式図



岡崎城二の丸能楽堂

能舞台における橋掛りの位置

2 発掘調査で確認された鹿児島城跡の能舞台跡

次に鹿児島での能楽の広がりや裏付けの能舞台について述べる。

能舞台は、近世初期に完成したといわれており、大きく京間3間四方を標準とした「本舞台」、後座に斜めに取り付けられる役者の通路及び舞台の一部となる「橋掛り」、松の配置、謡の座る「地謡座」、笛方・太鼓方などが座る「後座」から構成される⁽²⁵⁾。

(1) 鹿児島城跡で確認された能舞台橋掛り跡⁽²⁶⁾

本丸跡の能舞台跡は、鶴丸城跡保全整備事業に伴い、平成27年度に発掘調査が行われた。明治6(1873)年に成尾常矩によって書かれた「鹿児島城本丸御殿配置図」では、能舞台が描かれている場所にあたる。

昭和53・54年度の黎明館建設に伴う発掘調査では、「鹿児島城本丸御殿配置図」の配置とほぼ同様の配置で建物跡が確認されることがわかっており、この周辺で能舞台跡に近接する麒麟之間やサキ之間、奥御書院などの建物が確認されていたことから⁽²⁷⁾、能舞台の発見が期待されていた。

発掘調査の結果、近世の能舞台橋掛り跡とそれに平行する地業4基が確認された。橋掛りとは、「本舞台」と「鏡の間(楽屋)」を結ぶ通路で、舞台の延長にもなる。発掘調査では、その床面を確認した。

検出した橋掛りの床面は、長さ約950cm、幅約150cm、深さ約30~35cmであるが、上部は後世の攪乱のために削平されていた。底面は、逆半円形の溝状の硬化面を作り、その硬化面の上に漆喰を貼り付けていた。保存目的の発掘調査のため、遺構検出に止めており、漆喰の厚さは不明。漆喰の表面は平滑に整えられ、研磨されていた。半円状に土を掘りくぼめて硬化面をつくり、その上に漆喰を敷固めるのは、音を反響させて響かせるという音響効果を狙っ

たためと考えられる。本舞台や橋掛りの舞台下は、建物側壁に沿ってのみ柱を用い、中央部分は床板を張っただけで床下は空洞になっている。また、舞台と橋掛りは側面も板で密封されている。そのため、舞台上での足拍子の響きは、地面に反響して響くようになっていた。地面を堅くすればその分反響も大きくなる。

また、橋掛り周辺では、3cm~5cmの黒色の細長い円礫が多く出土した。これらは、光を反射させてライトの役割をする白砂に利用された可能性がある。

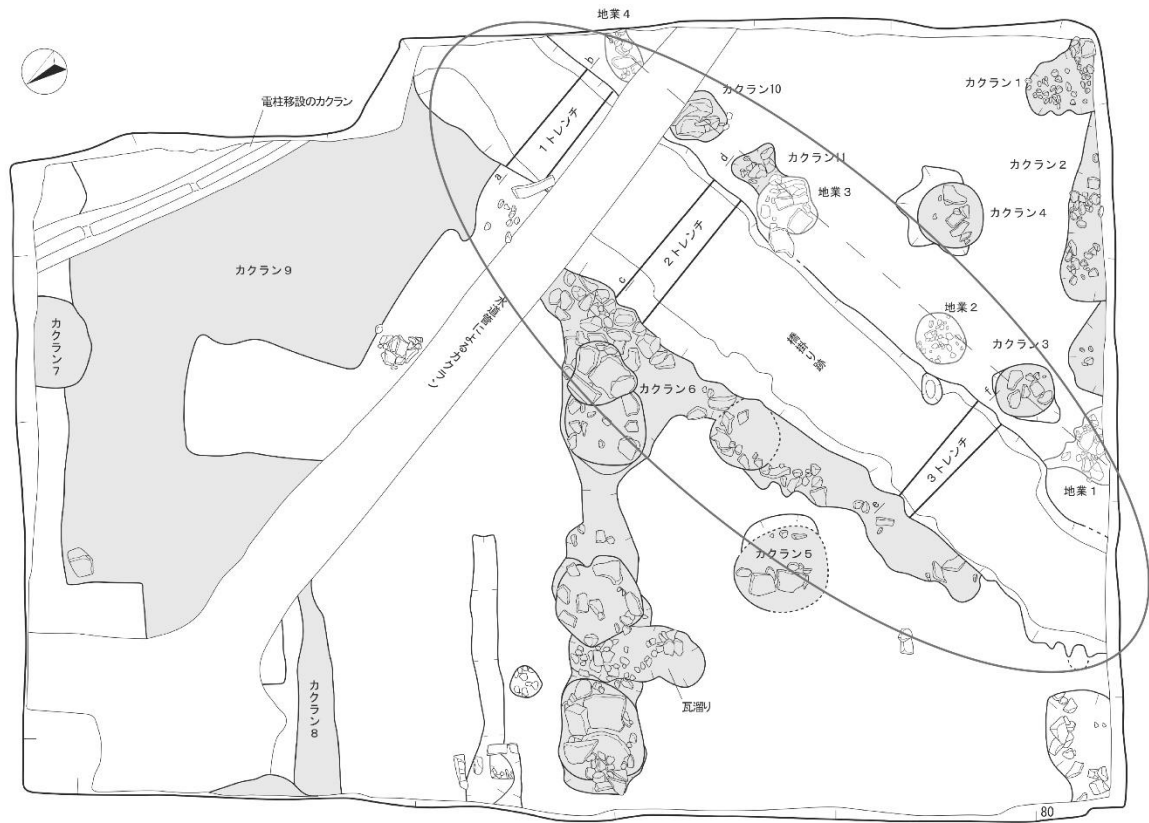
橋掛り周辺では、地業1~4が確認された。地業とは、地下に穴を掘り、その中に溶結凝灰岩を敷詰めて強く叩きしめた南九州独特の建物の基礎工法である。これらは、能舞台の橋掛りの上屋構造の基礎の可能性はある。ただし、それぞれの柱間は、約1.8m~2.1mであり、均一ではないなど、断定はできない。

橋掛り跡の1~3トレンチの出土遺物は、18世紀~19世紀の瓦や陶磁器が大半を占めていることから、この能舞台は、元禄9(1696)年の大火の以降に建立されたと考えられる⁽²⁸⁾。この能舞台は、まさに前述した宝暦12(1762)年に島津重豪が自ら演能し、島津斉彬が能楽をみた能舞台であると考えられる。

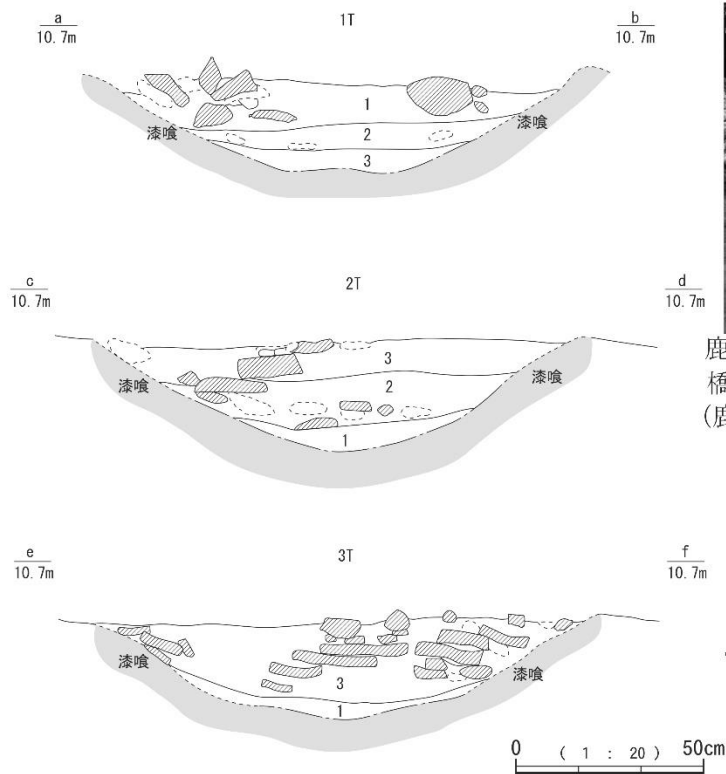
この発掘調査では、明治6(1873)年の「鹿児島城屋形及びその周辺図」に描かれている能舞台の位置が明らかになった。また、確認された能舞台橋掛り跡は、全国的に少ない近世の能舞台の構造を明らかにする上で重要な調査成果である。

(2) 近世能舞台跡の地下構造

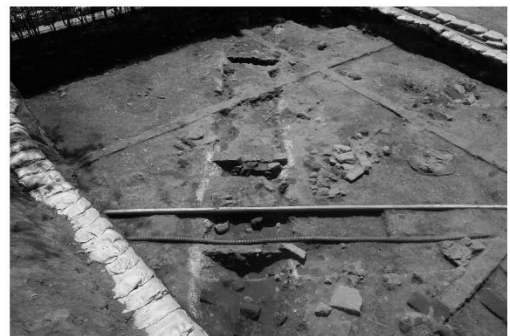
能舞台跡の発掘調査事例は、全国的に少なく、鹿児島城跡を除けば、10例に満たない⁽²⁹⁾。また、鹿児



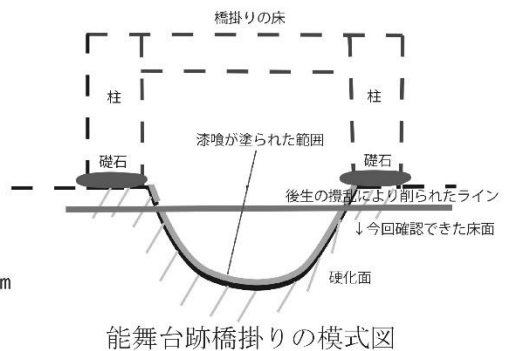
近代以降地業
鹿兒島城跡能舞台跡平面図 (鹿兒島県立埋蔵文化財センター 2022a より)



鹿兒島城跡能舞台橋掛り跡土層断面図
(鹿兒島県立埋蔵文化財センター 2022a より)



鹿兒島城跡の発掘調査で確認された能舞台橋掛り跡
(鹿兒島県立埋蔵文化財センター 2022aより)



能舞台跡橋掛りの模式図

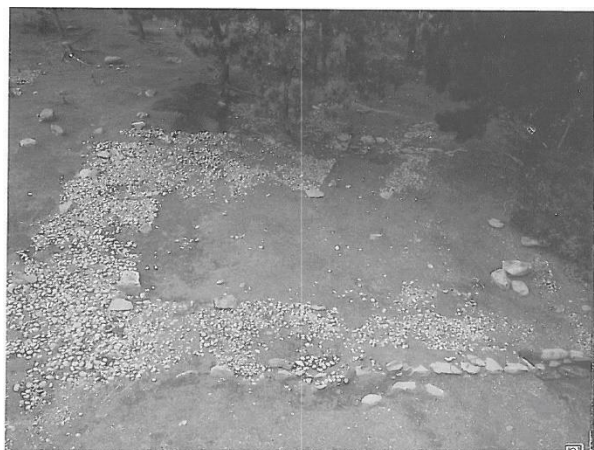
鹿兒島城跡の発掘調査で確認された能舞台跡

島城跡では橋掛り跡しか確認できておらず、能舞台全体の地下構造は確認できていない。そのため、地下構造がほぼ完全な形で発掘調査された他の能舞台跡の事例と鹿児島城跡とを比較する。

堀秀治陣跡 ⁽³⁰⁾

佐賀県唐津市に所在する。文禄・慶長の役（1592～1598年）の際に築かれた名護屋城跡周辺の有力武将の陣跡のうち、堀秀治の陣跡である。完全な形で発掘調査された最も古い段階の能舞台跡である。

この能舞台跡は、建物外周に沿って周囲に敷石遺構が巡る礎石建物である。地下は、土坑はあるが一段掘りくぼめておらず、床に漆喰も貼られていない。周囲にある敷石遺構は、現在の能舞台にある建物周囲に玉石を敷き詰めた白州の役割であると考えられる。日光を反射し、ライトの代わりに役割をしてい



肥前名護屋城跡の堀秀治陣跡の能舞台跡
佐賀県教育委員会 1993『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡－堀秀治陣跡－』より

たと考えられる。

能舞台の地下構造は、堀秀治陣跡のように地面を掘りくぼめないものもあるが、地面を掘りくぼめるもの、本舞台下に音を反響させるための大甕を設置するものなど多様である。これらは音響効果を高める狙いがある。

彦根城跡 ⁽³¹⁾

滋賀県彦根市に所在する。能舞台跡は、寛政 12（1800）年に井伊直中によって建立された彦根藩の政務を司る上屋敷であった表御殿跡と隠退した藩主やその家族が居住する下屋敷であった槻御殿の 2カ所で確認された。

表御殿の能舞台跡は、本舞台、地謡座、後座の下には、舞台の上屋と同じ形で一段掘り下げ、その坑の上に漆喰を貼り付けた漆喰枱が設けられていた。橋掛りは、本舞台から連続する（半円形に掘りくぼ



東京大学本郷構内の遺跡医学部教育研究棟地点の能舞台跡
東京大学埋蔵文化財調査室 2020『東京大学本郷構内の遺跡医学部教育研究棟地点』東京大学埋蔵文化財発掘調査報告書 14 より



彦根城跡の能舞台跡

彦根城博物館 1988『特別史跡彦根城跡表御殿発掘調査報告書』彦根城博物館発掘調査報告 I より

発掘調査で確認された能舞台跡

めた) 溝状遺構に漆喰が貼り付けられている。漆喰枱に設置したと考えられる甕も出土している。鹿児島城跡と同じく音響効果を高める工夫をしていたと考えられる。

井伊直中が隠退した文化11(1814)年に建立された榎御殿の能舞台跡では、舞台の上屋と同じ形で地面を一段掘り下げ、そこに枱を作ってはいたが、枱には漆喰ではなく堅く焼き締めた山土が用いられていた。

東京大学本郷の構内遺跡医学部教育研究棟地点⁽³²⁾

東京都文京区に所在する加賀前田藩上屋敷跡である。発掘調査では、遺構上部が削平されているものの、能舞台跡下部がほぼ完全な形で調査された。

能舞台跡は、本舞台、地謡座、後座の下と同じ形で一段掘り下げ、その坑の上に漆喰を貼り付ける。漆喰は床下約10cm、立ち上がり約15cm~20cmで、立ち上がりが厚く貼り付けられている。漆喰の表面はきわめて平滑に調整され、光沢が確認できるほど研磨されている。坑の本舞台の4隅には、一段掘り下げた坑の上に直接柱を据える礎石を置いていた。

橋掛りは、本舞台から連続する(半円形に掘くぼめた)溝状遺構に漆喰が貼り付けられている。漆喰は本舞台よりやや薄く、底面10cm、立ち上がり15cmで貼り付けられている。

出土遺物は19世紀前半~中葉のものが中心である。地面を一段掘りくぼめ、その上に漆喰を貼り付ける地下構造と甕の設置は、音響効果を高めるためと考えられる。

彦根城跡表御殿跡や東京大学本郷の構内遺跡医学部教育研究棟地点の能舞台跡の本舞台の地下構造は、地面を一段掘りくぼめ、その上に漆喰を貼り付ける漆喰枱を設け、音響効果を高める工夫をしていた。平成27年度の発掘調査では確認できなかったが、鹿児島城跡の本舞台跡の地下構造もこれらと同様、本舞台や後座の下を一段掘りくぼめて漆喰を貼った漆喰枱をもつものであったと考えられる。

鹿児島城本丸跡と同じ地下構造を持つのはこの2例だけである。彦根城跡表御殿跡は彦根藩の藩庁である上屋敷、東京大学本郷の構内遺跡医学部教育研究棟地点は加賀前田藩の江戸の上屋敷である。かつて鹿児島城にあった能舞台は、発掘調査や明治時代の古写真がないため、上屋構造は不明だが、これらと同様、本丸跡に建つにふさわしい地下構造を持った建物だったと考えられる。

(3) 鹿児島城跡の敷舞台跡

鹿児島市立美術館が所蔵する明治6(1873)年に書かれた成尾常矩の「鹿児島城本丸殿舎配置図」(鹿児島市立美術館所蔵)には、能舞台の他に「敷舞臺」が記されている。敷舞台とは、室内の能舞台のことである。前述した天明7(1787)年に発布された薩摩藩の能役者に関する規定では、「御能役者」は、念頭・節句ごとに登城して藩主に謁見しているが、その謁見の場がこの「敷舞台」であった⁽³³⁾。昭和53・54年の黎明館建設に伴う発掘調査や鶴丸城跡保全整備事業にかかる発掘調査では、「鹿児島城本丸殿舎配置図」とほぼ同様の配置で建物跡が確認されており、この図の信憑性が高いことが明らかになっている⁽³⁴⁾。

黎明館建設に伴う発掘調査では、この敷舞台推定地周辺の発掘調査が行われている。この周辺では、溶結凝灰岩の切石を利用した雨落溝に囲まれた区画に、建物基礎と考えられる安山岩質の自然石の礎石及び地業が確認された。この地区の建物跡を「鹿児島城本丸殿舎配置図」と比べた結果、b~f-23~26区画が敷舞台のあった地点と考えられる⁽³⁵⁾。この地点の建物跡の基礎工法はすべて地業であった。この地点の建物跡は、周辺と一体となった本丸御殿の一部であり、能舞台跡と同じような、地下を一段掘りくぼめて漆喰を貼り付けて漆喰枱をつくる地下構造は確認できていない。おそらく御殿の建物の一区画の床上に舞台を設置したためと考えられる。

黎明館が所蔵する「天保年間鹿児島城下町絵図」(玉里島津家資料)は、鹿児島市立美術館所蔵のものを精密に写したのと考えられるが、この絵図では、本丸に敷舞台の隣にあった御対面所と書かれた建物が描かれており、絵図中のこの建物かその横にある建物の中に敷舞台があったと考えられる。

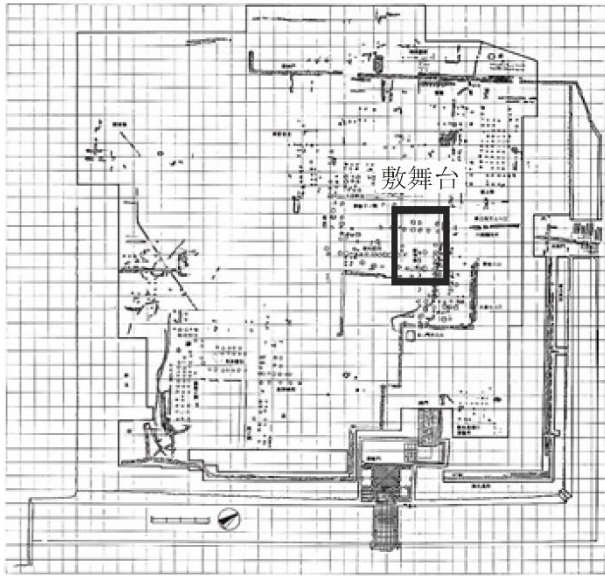
これまでの発掘調査では、本丸にあった二つの能舞台の場所が特定され、能舞台跡については、その地下構造についても明らかになった。

4 鹿児島城下町の能舞台

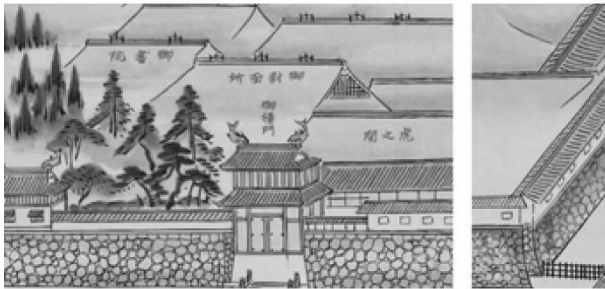
(1) 能楽師の能舞台

前述した天明7(1787)年に発布された薩摩藩の能役者に関する規定で新設された「御能役者」の中には、柏幾衛宅をはじめとして、自宅に能舞台を構える者がいたという⁽³⁶⁾。

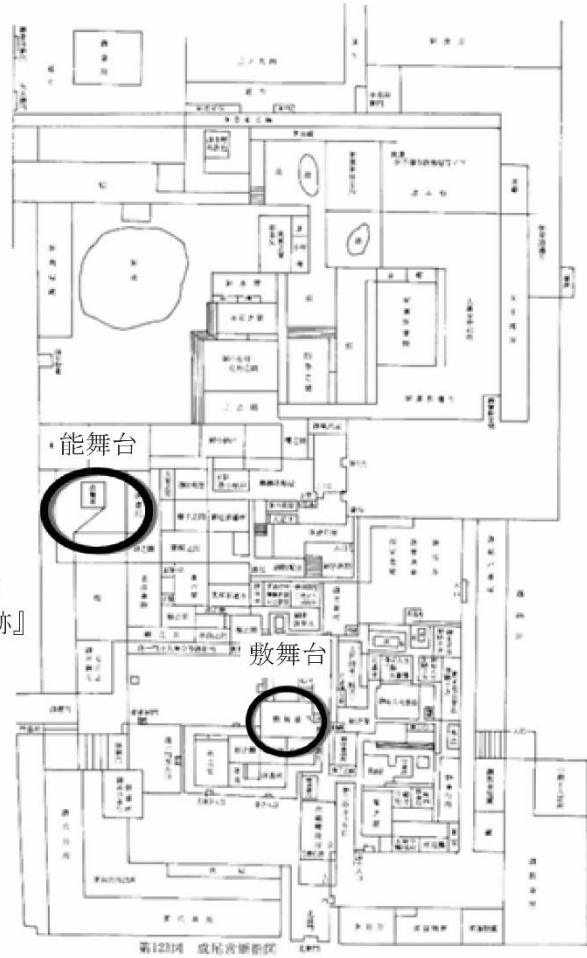
こうした能学者の屋敷にあった舞台は、絵図によって推測することができる。



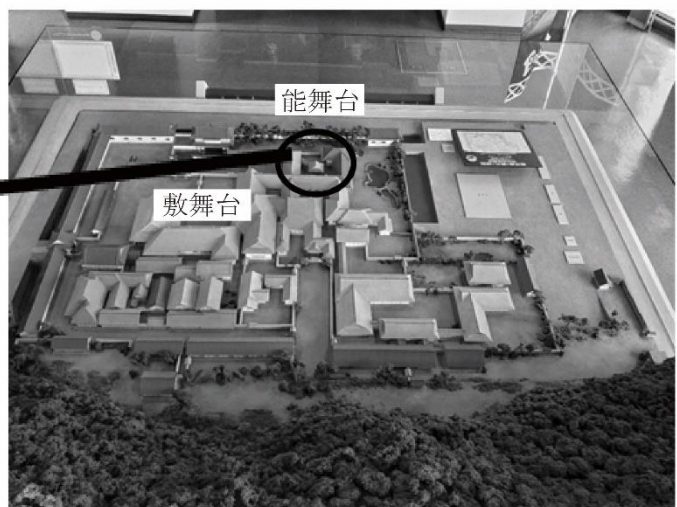
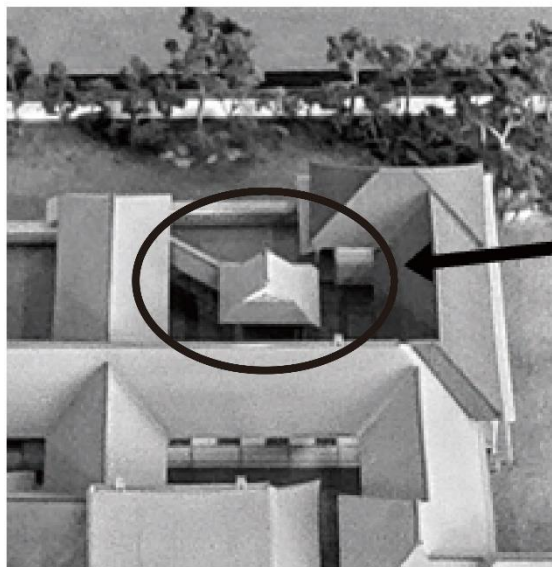
鹿児島（鶴丸）城本丸跡での式舞台・能舞台の位置
 (鹿児島県教育委員会 1982『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』
 鹿児島県教育委員会発掘調査報告遺書(26)より)



天保年間鹿児島城下町絵図（部分・玉里島津家資料）
 の本丸御対面所周辺



鹿児島城本丸跡の敷舞台・能舞台（鹿児島城本丸
 殿舎配置図の模式図）（鹿児島県教育委員会 1982
 『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』鹿児島県教育委員会発
 掘調査報告遺書(26)より)



黎明館1階望岳堂の鹿児島城本丸の模型
 (「鹿児島城本丸殿舎配置図」や黎明館建設に伴う発掘調査をもとに製作)

鹿児島城本丸跡の能舞台

「天保年間鹿児島城下町絵図」(以下、絵図)には、「士役者」や「御能役者」の能舞台が描かれている⁽³⁷⁾。武士小路(現在の柳町)の下には、「能ブタイ柏キ」と書かれており、天明7(1787)年に発布された薩摩藩の能役者に関する規定に登場する自宅の能舞台をもつ「柏幾衛」の事と考えられる⁽³⁸⁾。同人物と考えられる「柏幾衛門」は、「旧史官調」に能方として登場する能大夫(シテ方)の「柏幾右衛門」のことと考えられる。同書によると、柏幾右衛門家は初代忠久の母とされる丹後局の供として下向したとされる家柄で、江戸初期の長命家の名跡を受け継ぎ、第4代薩摩藩主島津吉貴の時に士分に取り立てられ、柏性に改めた家系である⁽³⁹⁾。

絵図では、塀に囲まれた屋敷の中にひときわ大きい建物が描かれている。絵図には屋根しか描かれていないため、独立した能舞台か、鹿児島城本丸の敷舞台のように建物内にある敷舞台かは不明だが、周囲の建物に近接していること、屋根が広く描かれていることから独立した舞台ではなく、屋敷の中に設けられた敷舞台であった可能性がある。屋根は、瓦葺きの表現ではないので、檜皮葺きや茅葺きなど、植物質の屋根であったと考えられる。

西田通りから絵図上方に延びた道沿い(現在の薬師町)には、「小幡氏」の文字があり、その字と重なるように方形造の植物質の屋根の建物が描かれている⁽⁴⁰⁾。小幡家は、中西長門守秀長が改姓前に名乗っていた名字(旧名は小畑弥兵衛)であることから⁽⁴¹⁾、中西氏の一族であると考えられる。

能舞台は、周囲の建物とは離れて描かれており、屋根も方形造であることから、鹿児島城本丸の能舞台と同じく独立した能舞台であった可能性がある。

また、鹿児島県立図書館所蔵の「天保年間鹿児島城下町絵図」では、舞台がどれか判断できないが、天神馬場(現在の東千石町)に「能中西」とあることから⁽⁴²⁾、中西長門守秀長の家系で、「旧史官調」で能方の筆頭である中西文右衛門などを輩出した中西家にも能舞台があったと推定されている⁽⁴³⁾。

(2) 神事での能舞台

絵図には、稲荷川河口付近の戸柱橋の左側の広間がある塀や土壁で囲まれた空間に「能舞臺」が描かれている。これは「頭屋能舞台」と言われ、初代薩摩藩主島津家久の時代に始まったと考えられる諏訪神社(鹿児島五社の第一)の祭礼で毎年7月18日に神事能(頭屋能)が行われた能舞台である⁽⁴⁴⁾。

屋根は植物質の屋根で、本舞台の横に橋掛りが描

かれている。屋根は四方造りで本舞台梁行が桁行に比べて広く描かれている。

絵図に描かれた能舞台は、檜皮葺きや茅葺きなどのすべて植物質の屋根であることがわかる。本舞台は、屋根構造や造りはそれぞれ異なっている。多様な舞台があったのか、簡素化して描かれているためそれぞれが違って見えるかは判断できない。

また、絵図では、柏家や小幡家の屋敷内の能舞台が大きく描かれている。能舞台は屋敷内の他の建物と比べて特段大きな建物とは考えられない。絵図では、その家の職能に関する建物を誇張して描いている可能性がある。これらの絵図に描かれた能舞台は、発掘調査だけではわからない、能舞台の上屋構造を考える上で重要である。

(3) 武家屋敷の能舞台

一所持格である都城島津家の鹿児島城下町の屋敷を描いた「都城島津家鹿児島御屋敷図」(滑川屋敷図)⁽⁴⁵⁾(都城島津邸所蔵)には、屋敷の中に「定舞臺」と「橋カカリ」が描かれている。この定舞台には、周囲に御庭があること、橋掛りが接続していることから、屋敷内に設置された舞台ではなく、鹿児島城跡本丸の能舞台と同じく、御殿建物と接続した独立型の能舞台であった可能性がある。屋敷には石管水道(石製の上水道)で水を引いて造ったと考えられる池をもつ御庭や茶室などもあり、上級武士の屋敷にも本丸御殿と同様、武家文化の施設が充実していたことがわかる。

島津家も将軍の御成を受けたが、藩内の上級武士も藩主の御成を受けることがあり、能や茶席などのもてなしが求められたと考えられる⁽⁴⁶⁾。

都城島津家は一所持格でも別格の家柄とはいえ、これまで知られていた城下町の能楽師の屋敷以外にも能舞台があることがわかった。

近世前期には、武士の間で能楽が流行していたこと、士分だけではなく町民や陪臣から取り立てられた「御能役者」がいたことから、他の武家屋敷にも能舞台があった可能性があり、城下町全体ではさらに多くの能舞台があった可能性がある。

おわりに

近世の鹿児島城下町では、藩主だけでなく武士や町民にいたるまで能楽が広がっていた。それを示すように、鹿児島城下町では、鹿児島城本丸だけでなく、上級武士の屋敷や能楽を職業とする家、神事能

中西能舞台 (天神馬場)

敷舞台・能舞台 (鹿兒島城本丸)

敷舞台・能舞台 (都城島津家鹿兒島屋敷)



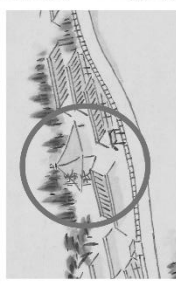
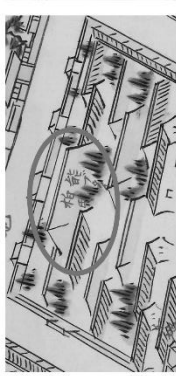
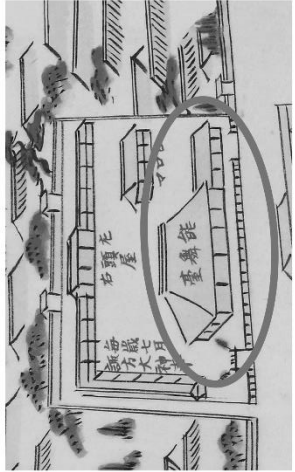
鹿兒島城跡推定範囲

小幡能舞台 (現在の薬師町2丁目付近)

小幡能舞台 (薬師町)

柏能舞台 (柳町)

頭屋能舞台 (春日町)



絵図に描かれた能舞台

※能舞台 (跡) 位置の推定に関しては、林和利2003『能・狂言の生成と展開に関する研究』世界思想社を基に、以下を参照した。
 鹿兒島県立図書館2001『旧薩藩御城下絵図』(大江出版社)
 五味克夫1980『天保年間鹿兒島城下町絵図』(文政・天保・安政) 鹿兒島県史料拾遺XIV『鹿兒島県史料拾遺』(高城書房)
 塩浦郁夫編2002『鹿兒島城下町絵図』(文政・天保・安政) 鹿兒島県史料拾遺XIV『鹿兒島県史料拾遺』(高城書房)
 塩浦郁夫・友野晴久編2004『新たな発見に出会う 鹿兒島城下町絵図散歩』(高城書房)

敷舞台 (現在の真千石3丁目付近)

敷舞台 (現在の小川町)

敷舞台 (現在の薬師町6番地付近)

敷舞台 (現在の真千石11番地付近)

頭屋能舞台跡 (現在の真千石11番地付近)

頭屋能舞台跡 (現在の真千石11番地付近)

頭屋能舞台跡 (現在の真千石11番地付近)

頭屋能舞台跡 (現在の真千石11番地付近)

頭屋能舞台跡 (現在の真千石11番地付近)

現在の能舞台跡推定地

天保年間鹿兒島城下町絵図 (玉里島津家資料) の能舞台推定地



「天保年間鹿児島城下町絵図（玉里島津家資料）」に描かれた都城島津家屋敷（滑川屋敷）



「都城島津家鹿児島御屋敷図（滑川屋敷図）」（都城島津邸所蔵）を一部改変

都城島津家鹿児島屋敷（滑川屋敷）の能舞台

を行う能舞台など多様な能舞台があった。

中世から近世初頭の「武」の面や幕末の「近代化」で注目されることの多い島津家だが、近世には鎌倉以来の伝統を持つ大藩にふさわしい芸術文化が花開いていた。

鹿児島城跡のこれまでの発掘調査では、多くの茶道具や犬追物馬場に関連する遺構など、多くの文化面を示す遺物・遺構が多く出土している。しかし、まだまだ価値付けが十分されていないものも多い。今後は、島津家の文化面に注目した調査を進め、島津家の芸術文化面を明らかにしていきたい。

註

- (1) 本稿では、「鹿児島城跡」と「鹿児島城」を使い分ける。現代の遺跡としての鹿児島城を述べる場合は「鹿児島城跡」、近世の鹿児島城について述べる場合は「鹿児島城」を用いる。「能舞台跡」と「能舞台」についても同様である。
- (2) 鹿児島県立埋蔵文化財センター2022『鹿児島城跡－総括報告書－』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (215)
- (3) 能と狂言は、同じ能舞台でも催される一体のものである。本稿では、能と狂言の総称を能楽とする。
- (4) 天野文雄 1987『岩波講座 能・狂言 I 能楽の歴史』など
- (5) 林和利 2003『能・狂言の生成と展開に関する研究』世界思想社
- (6) 田村省三 2013「能狂言正圓」『尚古集成館紀要』第12号 尚古集成館, 中西喜彦 2015「鹿児島県能楽の歴史散歩～薩摩藩主たちの愛好ぶり」『能楽の祭典』第30回国民文化祭鹿児島市実行委員会, 西野元勝・浅田剛士 2022「発掘調査からわかった島津氏の文化力1 (能舞台編)」鹿児島県立埋蔵文化財センター デジタルコンテンツ「かごしまの考古学」第14回(www.jomon-no-mori.jp), 宮本圭造編 2022『能楽資料叢書 7 近世諸藩能楽役者由緒書修正(下)』法政大学能楽研究所編
- (7) 関屋俊彦 1988「〈資料紹介〉島津家 黎明館 寄託能楽文書について」『国文学』第64号 関西大学国文学会, 田村 1996「資料紹介－「中西氏系譜草稿」－薩摩藩世襲能役者中西家の系譜」『尚古集成館紀要』, 第8号 尚古集成館, 註6文献の田村 2013
- (8) 註5文献
- (9) 註5文献, 註6文献の宮本編 2020
- (10) 島津家久に関しては、「島津家 18代当主」として記載される場合が多いが、本稿では、薩摩藩の「初代藩主」として記載する。他の島津家当主についても「第〇代藩主」として藩主の代番号を用いる。
- (11) 鹿児島県 1982『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』1582号
鹿児島県 1983『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』167号
- (12) 註5文献の林 2003
- (13) 鹿児島県 1982『鹿児島県史料 旧記雑録後編三』1711号
- (14) 鹿児島県 1985『鹿児島県史料 旧記雑録後編五』303号
鹿児島県歴史・美術センター黎明館 2022『茶の湯と薩摩』
- (15) 鹿児島県 1984『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』1074号
- (16) 鹿児島県 2006『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 伊地知季安著作史料集六』近秘野艸 1号
- (17) 註16文献
- (18) 鹿児島県 1976『鹿児島県史料 旧記雑録追録六』12号・17号・18号, 註5文献
- (19) 註16文献
- (20) 鹿児島県 1981『鹿児島県史料 斉彬公史料第1巻』165号
- (21) 註5文献
- (22) 註5文献
- (23) 註6文献の宮本編 2020
- (24) 藩法研究会編 1969『藩法令集 8 鹿児島上』2070号, 註5文献
- (25) 江戸遺跡研究会 2001『図説江戸考古学研究事典』柏書房, 小島芳正 1979「能舞臺變遷史」『能楽全書』臺四巻 東京創元堂, 谷口徹 2017「御殿－能舞台と庭園を中心に－」『近世城郭の考古学入門』高志書院
- (26) 鹿児島県立埋蔵文化財センター2022『鹿児島城跡－北御門跡周辺・御角櫓跡周辺・能舞台跡－』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (214)
- (27) 鹿児島県教育委員会 1983『鹿児島(鶴丸)城本丸跡』(鹿児島県教育委員会発掘調査報告書 (26))
- (28) 鹿児島城本丸跡で確認された遺構は、18世紀

- 以降のものが大半である。これは、本丸が元禄9（1696）年の大火によりほとんどの建物が焼失し、その後建て替えられたためと考えられる。
- (29) 註25の文献の江戸遺跡研究会2001, 谷口2017
- (30) 佐賀県教育委員会1993『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡—堀秀治陣跡—』
- (31) 註25文献の谷口2017, 彦根城博物館1988『特別史跡彦根城跡表御殿発掘調査報告書』彦根城博物館調査報告I
- (32) 東京大学埋蔵文化財調査室2019『東京大学本郷の構内遺跡医学部教育研究等棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室報告14
- (33) 註24文献
- (34) 註26文献
- (35) 鹿児島県教育委員会1983『鹿児島城本丸跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第26集
- (36) 註24文献
- (37) 註5文献。註5文献では、鹿児島県立図書館所蔵の「天保年間鹿児島城下町絵図」を用いているが、本稿では同じ鹿児島市立美術館のものを写したと考えられる黎明館所蔵の「天保年間鹿児島城下町絵図」(玉里島津家資料)を用いた。
- (38) 註5文献
- (39) 鹿児島県2012『鹿児島県史料旧記雑録拾遺記録所史料一』旧史官調162号, 註6文献の宮本編2020
- (40) 鹿児島県立図書館の絵図では、「能ブタイ小幡」と書かれる(註5文献)。
- (41) 鹿児島県2012『鹿児島県史料旧記雑録拾遺記録所史料一』旧史官調88号, 鹿児島県立図書館1973『本藩人物誌』鹿児島県史料XIII
- (42) 註39文献, 塩満郁夫・友野春久編2004『新たな発見に出会う 鹿児島城下絵図散歩』高城書房
- (43) 註5文献
- (44) 註5文献
- (45) 都城島津邸米澤英明氏御教示。

榮久志, 三垣恵一, 三木靖, 宮下愛, 宮武正登, 山下智沙子, 吉村晃一, 米澤英明, 渡辺芳郎
鹿児島県立埋蔵文化財センター
都城島津邸

(にしのもとかつ 本館学芸課主査(兼)文化振興課鶴丸城跡保全整備班)

※図面の参照元については、全て各図に記載した。

〈謝辞〉以下の方々・機関から御教示・ご指導を賜った。記して謝したい(敬称略, 五十音順)。
浅田剛士, 阿比留士朗, 小野恭一, 大久保浩二, 上村俊洋, 黒川忠広, 黒木梨絵, 崎山健文, 新福大健, 関明恵, 中野由佳子, 中西喜彦, 中原一成, 永瀆功治, 深港恭子, 前迫亮一, 松尾千歳, 松田佳奈, 彌